

あとがき

五十代も半ばを過ぎる頃、妙に物書き気分が高まった。そこで、親しい友と語らい、『琅』なる同人誌を興し、少しずつエッセイを書き連ねてきた。二〇〇六年三月、長い教職人生から引退し、時もよしと、十年越しに書き溜めてきたそれらの文章をまとめたのが、エッセイ集『十三分の一』（武蔵野書房）である。以下は、その折のあとがきである。

「……たとえ苦行に落ち入っても、書くことは悦楽である。この苦と楽が、まさに私を至福の世界に導き入れた。が、物書きをする至福の中から、やがて私は、人に向け、世の中に向け、余程大きな怒りを籠らせている自分自身を見出した。そして、その怒りが、書くことによって定かになり、次いでさまざまな念いを生み、さらにまた書き進めていくうちに鎮まっていくことにも気が付いた。「泣きつ、笑いつ」という表現があるが、私にとって、書くこととは、大げさに言えば、私が思う世間の不条理に対して、まさに「怒りつ、念いつ、鎮まりつ」することだった。

本書の題名は、最新作の作品「十三分の一」から取ったものである。お読み頂ければ分かるように、それは、このエッセイが、「怒りつ、念いつ、鎮まりつ」という主題をもっともよく体現しているからであるが、それがまた、巧まらずして、長年書き綴ってきた中での区切りのエッセイだった

ことは、書くことへの私の主題が、知らずして、まさしくここにあったことを示す必然の成り行きだったのではないだろうか。本書を『十三分の一』とした所以である。

とは言え、最終作「十三分の一」は、知己の人々にとっては極めて皮肉な内容を含み、私とのこれまでの関係性次第で、思わず心惑う向きも少なくはないはずである。それこそ、十三分の十二くらいの人が当たるかも知れない。私はしかし、個人的な関係性など一顧だにすることなく、どこまでも己を省み、自戒するため、またおこがましく言えば、文芸的に奥行きのある文章に挑戦し、心鎮めてみたかっただけである。これはもちろん賞めすぎだが、私の文章をして、「軽妙にして重厚、挑発的でいて温かい、情緒的でいて論理的」と評し、私を痛く喜ばせたのは、同学の土・保坂三雄氏であるが、この「十三分の一」に限らず、本書のすべての文章を、このような海容の気持ちでお読みいただき、そこに何か共感して頂けるものがあるなら、著者として、この上ない喜びである。」

このあとかぎに認めた念いをそのまま、爾後も『琅』を中心に書き続けてきた。『十三分の一』の作品を精選し、「人は何故書くのか」ほか諸編を加えたものが本書である。

二〇一一年十月 清秋の日

宗内 敦